

甲状腺外科草子 116

藤堂高虎の遺訓：高山公二百ヶ条③

杉野圭三

家来の使い方や家老の心得が延々と続く。苦勞人の高虎ならではの反省があるのだろう。

【家来常々召仕様之事】(家来の召使いかた)

第 20 条 家来夫々に情をかけ目を明き召仕事主人の利口にあらすや主人情深きに下人邪の奉公ふりあらハ天罰のかれすたちまち悪出来て命を失ふ事眼前なり(家来に情をかけ、道理をわきまえて使うのは利口な主人だ。主人が情け深いのに下の者が邪悪な奉公では、天罰を逃れられず、たちまち悪事が出現し、すぐに命を失う)

第 21 条 主人たる者不断内の気をかね諸事恥敷と思ハハ悪事もなく腹も立へからすまして一人二人召仕者ハ心得有へし(主人は、普段から内に気を配り、諸事控えめに振る舞えば悪い事も起きず、腹を立てることもない。一人、二人を召し使う者はこのように心得るべきだ)

第 22 条 主人目の明さるは必禍多かるへし奉公よくする者を不見付当座気に入かほ成を悦ひ禄をとらせ懇ふりするゆへに能奉公人氣をかへ暇をとるもの也主人の難にあらすや当座気に入かほの者ハまいすたるへし(主人にものを見る眼がないと必ず禍が多い。良く奉公する者に気付かず、当座のお気に入り悦んで給料を払い親しくし、良い奉公人は気持ちを変え転職する。主人が悪いからだ。当座の気に入り者とは下劣な者である)

第 23 条 悪敷主人ハ目にておとし気色しておぢらる、やうにうハつらにてする人ハおづへからす心もおくれ未練たるへし第一の草臥もの也善主人ハむさと人をしからす気に苦勞なくして物いはすともくらひ詰に召仕ゆへ下人共由断ならずせハせハといふ主人ハ毎の事のやうに下人覚へ不聞入ものなり(悪いあるじは目でおどし、顔で怖れさす。そのような人間に怖れたりしない。そうなれば心もひるみ未練

が残る。第一のくたびれものだ。善いあるじはやたらに人を叱らず気苦勞なく物言わずとも自然に仕事をするよう召し使うので家来たちは油断できない。せかせかと言うあるじはいつもの事のように家来たちは思い、聞き入れないものである)

「家来の召し使い方」の表題だが、主人の在り方が述べられている。指導者たる資格が無ければ部下を統率することはできない。

第 24 条 身に高慢する人ハ先近し

(高慢な人は先がない)

第 25 条 言葉多くて品すくなしと古人いひ伝り誠に眼前なり(言葉多い人は品性がないと古人が言う通りだ)

【主君江奉公之心持之事】(主へ奉公する心持)

第 27 条 不断御用に達へき覚悟心かけ由断不可有事(普段から御用をやりとげる覚悟を心がけ、油断しないこと)

【家老の心持之事】(家老の心の持ち方のこと)

第 31 条 身の欲に離れ姪乱を止め氣随を去り我仕度事を止めいやなる事を可用主人之仕置を守り末つかたの者へ裁定木を当ておとなしく心を持へし人ののだち侯様に仕り人のわざひおこる共異見をくわへあつかふ事尤也主人の氣に違ひたる人ありとも下二而理非を正し無如在においては身に咎をうけても人そこねさるやうに心得へし(欲を離れ、姪乱を止め気ままな態度を止め、自分のやりたいことを止め嫌なことでもする。主人の決まりを守り規範を示し年長者らしい心を持つ。人が伸びるように図り、他人に災いが起きても意見をして取り扱うことが大事。主人が気に入らない人があっても、下で理非を正し、手落ちが無い時には自分が咎められても、人に傷がつかないように心得るべきだ)

家老は主人の留守を預かり、代理として多くの家臣をまとめ、統率することが求められる。高虎はこの部分に重点を置いている。

参考資料：藤堂高虎公と遺訓二百ヶ条

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2024年10月17日